

ず、理の一心にも非ず、散心の中の一心なり。「念法華文字」とは、此の経は諸経の文字に似ず、一字を誦すと雖も八万法蔵の文字を含み、一切諸仏の功德を納むるなり。天台大師玄義の八に云く、「手に巻を執らざれども常に是の経を読み、口に言声無けれども徧く衆衆を誦し、仏説法せざれども恒に梵音を聞き、心に思惟せざれども普く法界を照らす」と上。此の文の意は、手に法華經一部八巻を執らざれども、是の経を信する人は昼夜十二時の持経者なり。口に読経の声を出さざれども、法華經を信する者は日々時々念々に一切経を読む者なり。仏の入滅は既に二十余年を経たり。然りと雖も法華經を信する者の許に仏の音声を留めて、時々刻々念々に我死せざる由を聞かしむるなり。心に一念三千を觀ぜざれども徧く十方法界を照らす者なり。此等の徳は偏に法華經を行する者に備われるなり。是の故に法華經を信する者は設い臨終の時、心に仏を念ぜず、口に経を誦せず、道場に入らずとも、心無くして法界を照らし、音無くして一切経を誦し、巻軸を取らずして法華經八巻を奉る徳之有り。是れ豈權教の念仏者の臨終正念を期して十念の念仏を唱えんと欲する者に百千万倍勝るの易行に非ずや。故に天台大師文句の十に云く、「都て諸教に勝る、故に隨喜功德品と言う」と。妙樂大師の法華經は諸経より淺機を取る、而るを人師此の義を弁えざるが故に法華經の機を深く取る事を破して云く、「恐らくは人謬りて解する者、初心の功德の大なることを測らずして、功を上位に推りて此の初心を蔑る。故に今、彼の行は淺く功の深きことを示して、以て經力を顯す」上。以て顯經力」の積の意趣は、法華經は觀經等の權經に勝れたるが故に、行は淺く功は深し。淺機を撰する故なり。若し恵心の先徳、法華經を以て念仏より難行と定め